

# ふしぎな木の実

—うつぼ物語より—



村井 トミ

一月号の「うつぼ物語」を読んで、そこからヒントを得て童話を創るようにとの編集部の依頼だった。このような古文から童話をつくるのはじめてなので、どんな話が出来上がるか、心もとないことだが、まず原文を読んでみた。

原文をかいつまんでみると、清原の俊蔭が遣唐使として召され唐土に渡る途中難船し、かろうじて波斯国に漂着する。悲しみのあまり観音を祈ると青い馬があらわれ彼をのせていく。そして柅檀の下で虎の皮を敷いて琴ばかりかなでている三人の人に琴を習う。その中に西の方に三年間も絶えない響の高い斧の音をききつける。その高い木の響は琴の音に通い合っているので、どうかして琴を一つ造るだけの木を手に入れようと思ひ斧の音を訪ねて、山を越え谷をわたり苦勞を重ねてたどりつく。そこには天にとどくばかりの山がそびえ、そこに深い谷に根をはり、先は天にとどくほどの大木の桐の木があり、そこに見るからに恐ろしい阿修羅が老いも若きも皆集つて木を切りこなしている。俊蔭はここで命をおとす覚悟の上で、阿修羅の中にただ一人入っていく。阿修羅は恐ろしい形相で、ここへ来るものは皆食べてしまうことになっているが、人間の身でどうして来たか、と牙をかみ出して怒る。俊蔭は涙を流しながら日本国の使として父母の悲しみをふりすてて、ここまで渡つて来た苦勞は並大抵のことでないことを話す。阿修羅は、日本の国で血の涙を流し

ながらわが子俊蔭を待つている親のいることを聞いて特別に命をとることはやめ、大般若經を書いて昔犯した阿修羅の罪を供養してくれと言う。俊蔭は長年父母にひどい悲しみを与えていたので、せめてそのつぐないとして、そこに切り倒されている木の片はしを頂戴できれば、それで琴をつくり、いい音を父母に聞かせて慰めたいと、木のはしをもらうことを懇願する。

ここで一月号は終っている。

そこで人によっていろいろとヒントの得かたもちがうと思うが、私はこれを読んで次の三つのことを感じた。

一つは難船して漂着した鳥、獣一ついない海岸に突然鞍をおいた青い馬があらわれていななき、俊蔭をのせて走るといふ奇蹟的なことが起ったこと。これはいかにも愉快だった。

もう一つはあらゆる苦難にぶつかりながら

希望を捨てずに目的にたどりつく。しかも一口に食べられてしまいうる恐ろしい鬼の中にふみこんでいく、というところに冒險的な面白さがあり、もっと先をよみたい気持ちになった。

もう一つは何ものにも、何事にもかえられない親と子の美しい情愛、の点だった。

それで前の二つ、奇蹟と冒險的な考が頭の中をぐるりとまわり、勝手な想像の翼が、でたらめにのびていった。

不思議な木の実……一つしかない白い木の実……高い山……白い小鳥がたくさんとびまわって木の実を守っている……魔法の力をもった恐ろしい大男が木の下に住んでいる……誰か取りに行く……大きい山、岩……黒い雲……大粒の雨……流される……救い……奇蹟  
どこまでいってもきりがなし。頭に浮んだままに筆をとってみることにする。

## ふしぎな木の実

ある高い高い山の上に一本の木が生えていました。この木にはたった一つだけ白い実がなっていました。まあある木の実。そして不思議なことにこの実は一年中いつも落ちずについていました。そしてこの木の下には恐ろしい大男が住んでいて、魔法の力を持っていて、たくさんの白い小鳥がこの白い実を守りながらとんでいるということです。

おとなも子どもも年寄りも皆この実のことを知っていました。でも今までこの白い実を取りにいった人は誰も二度と帰っては来ませんでした。

一郎さんは心の優しい子どもでしたが、魔法の木の実のことがいつも心にかかって何とかしてその実をとってみたいと考えていました。

ある晩のことです。

一郎さんは夢をみました。乞食のような

りをした不思議なおじいさんが枕元に立っているのです。「早く行け、早く行け」というように、おじいさんは杖を二度山の方を指すといつの間にか消えてしまいました。

一郎さんはとび起きました。何だかいそがなければならぬような気がしてただ一人家を出ました。

あたりは真暗です。どの家も静かに寝ています。犬も小鳥も寝ています。一郎さんはこんな夜中に外へ出たのははじめてなのに不思議にこわくありません。何だかさっきの夢の中のおじいさんが守ってくれるような気がしてならないのです。

どんだん、どんだんかけていきました。とうとう山の下まで来しました。

さあこれからたいへんです。見上げても見えないような山、見ただけでもため息がでそうです。でも一郎さんはどんなことがあっても今日こそ白い実の所まで行ってみようと思ひました。

木がぎっしりと立ち並んでいる間に細い道

がありました。ごろごろ石ころがころがっていたり、木の枝が長くのびていたりして、ころんだりくぐったりしながら一郎さんはだんだんにその道を登っていきました。

急にザワザワと枝がゆれたと思うと大きな鳥のようなものがとんでいったようでした。足もとをちよろちよろと何かが通り過ぎました。そのたびに一郎さんはどきんとしたり青くなったりしましたが、こんなことで負けてはたいへんと思つてがんばりました。元気をつけるようにわざと大きな声で歌をうたつて歩きました。その歌声に誰かが答えるような気がして耳を澄ましました。でも誰もいるようすがありません。

急に眼の前が明るくなつてきたと思つたら、大きな岩が折り重なっている岩山の所に出ました。いつの間にか夜も明けて朝になっていました。お日様がまぶしくいらくに輝いています。岩のわれ目に細い川が流れていきます。きれいな水です。川の底の石ころまでよく見えます。どこにも道がついていません。

岩をよじのぼるより仕方ありません。うっかり手を離したらそれこそたいへんです。しっかりつかまりながら少しづつ少しづつ岩をのぼっていきました。

ふと見上げると大きな岩の一かたまりがころがり出し今にも一郎さんの方へぶつかりそうです。

アッ！一郎さんは思わず眼をつむりました。もう駄目だと思ひながら思わず、「おじいさん！」と叫びました。夢の中のおじいさんのことでした。

すると不思議なことに急にその石が反対の方向にごろごろころがって行ってしまいました。一郎さんは夢中で岩をよじのぼり岩の上に出ました。

すると今度は青空が急に消えて黒い入道雲がもくもくと動き出し、まったく行く先が見えなくなつてしまいました。雷がなり、いなくずまが光つたり、痛い程の大粒の雨が降り出したと思う間に水に押し流されてしまいました。どこをどう通つたのか、流されたのかよ

くわかりません。一郎さんは思わず

「おじいさん、おじいさん」

と叫びました。

するとどうでしょう。どこからか、スーッ

と木の枝が頭の上のびてきました。一郎さんはいそいで木の枝につかまりました。枝は

ぐんぐんのびて一郎さんを広い芝生に下しました。そこはやわらかい緑の草が一面に生えていて、まるでピロードの園のようでした。

一郎さんは何度も眼をこすりながら大きな眼をみはりました。

なぜってその緑の草の上に一本の木が生えていて、白い木の実が美しく光りながらなっているではありませんか。

そろそろ白い小さい小鳥があちこちとび交しています。

これだ！

と思うと一郎さんは思わずブルツとふるえました。驚ろきと喜びが一度にきたのです。

木の下に小屋がありました。これこそ恐ろしい大男の小屋にちがいありません。せつかく

ここまで来て大男に見つかってはたいへんです。そうとそうと家の中のようすをうかが

いがいながら木に近づいていきました。大男はすごいいびきをかいて寝ていました。

一郎さんは急いで木に登って白い実を取りました。

すると不思議、不思議、その辺をとんでいた白い小鳥たちが皆かわいい人間の姿になって一郎さんのまわりに集ってきました。この子どもたちは大男に魔法で小鳥にさせられたのかもしれない。

大男は——とのぞいてみると、これも不思議いつの間にか大きな黒い鳥になって小屋の中で大きな羽をバタバタと動かしていました。

皆はどんどんかけて山を下りていきました。登る時はあんなけわしい山が、帰りには立派な道になっていて、どんどん下りられるのです。

もうここまで来れば安心です。

皆はお互によるこび合って仲よく手をつないで山を下りていきました。(おわり)

何だか知らだらと、ままとりのないものになつてしまった。頭に浮かぶままに書いてい

たら思いがけぬ結びとなつてしまった。

さてこれを実際に年長組の男の子などに話したとしたら果して喜んで聞いてくれるかどうか？ 疑問である。

しかしよい童話にはならなかったかもしれないが、私自身想像の世界に遊んだことは確かであり、その点はしばしの間たのしい思いをした。

おとなもおとなばかりの世界に、いつも当然のようにいないで時にはこんな時間もかえって必要ではないのかしらなどと思つたりした。